

高校生がやってきた！

森 元 孝

昨年12月12日火曜日朝、記念会堂前の大型観光バス。なるほど、これで来ているのだなと思いつつ、スロープを登っていった。研究室で授業前の深呼吸。12月の最終授業というのに、超緊張。というのも、つい頼まれてしまって引き受けた高校生の授業見学。「そんなことをやっていいのか」という、硬い同僚諸先生の声も聞こえてきそうであるが、「新しい教室棟36号館での授業」「Power Point を使った授業」「東京を主題にしている授業」などが理由なのであろう。早稲田を目指す、ある高校からの生徒さん30数人に、私の授業を見せることになってしまったゆえ、年末最終授業というのに、ドキドキ。

その前々週から、受講している学生さんたちには、「高校生がこの授業を見学に来てもいいか」と繰り返し尋ねたものの、みんな何のこともよく把握できていないようであった。12月最終授業、もちろん受講している学生さんには、冬のレポートの情報を取得する重要な機会。敢えて苦言を呈すれば、いつも見ない顔が、にわかになんか出てくる授業。2限の授業と言えども、12月ともなれば、新学期の意気込みもだいぶ萎えた人も少なくないのか、眠そうな目をした人、そして遅刻してきた人、教室に入るや制服の高校生が集まって坐っているのを見て、何事かという顔。

授業途中で他の予定があるとのことで、高校生たちは、きわめて静かに途中退席。後でひとつづつ感想などを聞いてみた。ちょうど、東京湾臨海副都心開発についての話だったこともあり、「東京のことが聞けてよかった」とのこと。何よりであった。

「大学が開かれる」「開かれた大学」というのが、こういうことなのかどうかよくわからないが、これからこういう試みは増えてこよう。大学の教員が高校に行く、そして高校生が大学の授業を見に来る。「見てから決める」というのは正当な主張である。さてさて、私の授業を見たゆえか、あるいは言われるところの18歳人口の減少か、それとももっと他の理由か、今年の文学部の志願者は昨年より減った。教務主任、入学センター、ゴメン！

2001年4月5日